

「NHKが危ない」

2014年05月16日

「ジャーナリズムが劣化している」という言葉をしばしば聞く。ジャーナリズムの劣化とは、権力を持つ者の意向に沿い、国民が知るべきことを報道しない状況をいう。ジャーナリズムは、権力の乱用を監視する第四の権力と言われているが、新聞、テレビは、政権や大企業におもねる報道に堕している。批判的なことを言う人は発言の場を奪われ、当たり障りのない解説者の言葉ばかりが伝わってくる。3・11の地震と津波で引き起こされた原発事故に関する政府や東電の発表は虚偽と不正が多く、メディアも真実を伝えていないと誰もが思っている。原発事故がなかったかのように、再稼働が進められ、外国に原発を売り込んでいる。ジャーナリズムの貧弱さの現れである。

メディアは、公正、中立、不偏不党で、その基底に社会的弱者、発言できない人々に寄り添い、彼らの思いを代弁することが求められている。NHKに勤めていた池田恵理子氏、戸崎賢二氏、永田浩三氏の三氏が『NHKが危ない 政府のNHKではなく 国民のためのNHKへ』を著し、自分たちの苦い経験からNHKの内情を告発し、今後のジャーナリズムのあり方について提言している。

安倍政権はNHKの役員人事に、安倍政権の右翼的な政策を進めるような人物を登用している。会長に就任した靱井勝人氏は、慰安婦は戦争地域では、どの国でもあったと言い、「民主主義ではっきりしているのは多数決。民主主義に対するイメージで放送していけば、政府と逆になるということはありません」と批判精神を欠いた、政府べったりの発言をしている。経営委員になった百田尚樹氏は、「南京虐殺」はなかったと言い、都知事選で「都知事になるには、田母神さんしかいません。それ以外の候補、何人かの重要な候補と言われている人間ですが、私から見れば人間のクズみたいなもんです」と応援演説をしている。長谷川三千子氏は、「わが国の今上陛下は（「人間宣言」が何と言おうと、日本国憲法が何と言おうと）ふたたび現人神となられたのである」と、時代錯誤の天皇礼賛を書いている。このような人たちが経営指導者であるNHKに公正、中立な報道は全く期待できない。

池田恵理子氏は「慰安婦問題」を精力的に取り上げてきた。2000年12月に「女性国際戦犯法廷」が開かれた。慰安婦とされた女性たちの息苦しい証言、また日本兵の強姦証言など、戦時下の生々しい事実が浮き彫りにされた。NHKは「問われる戦時性暴力」というタイトルで法廷の様態を放映する予定であった。ところが放映前に、政治介入がなされ、ズタズタに歪められて報道された。当時の安倍晋三官房副長官などが関わったと言われている。番組改変裁判において、NHKは「通常の編集にすぎない」と政治介入には沈黙した。原告は敗訴し、異動が命じられている。ジャーナリズムの使命を放棄したNHKの姿であったと池田氏は苦渋の体験を書いている。

報道人にとって「公正、中立、不偏不党」は原則であろう。しかし、政治批判や告発の抑制に利用されることもある。また、両論併記になって、意味を持たない報道になることもあり得る。要は、社会的に差別、抑圧されている人々の人権と福祉が保障されるような視点を持つことであろう。三氏は、実名をあげ、成功と失敗を率直に書いて、ジャーナリズムの健全化を願っている。NHKがジャーナリズムの使命を回復するためには、政府から切り離された独立性が確保できた時であろう。